

# Sheaves on Manifolds

大柴寿浩

## 1 ホモロジー代数

### 1.3 複体の圏

$\mathcal{C}$  を加法圏とする.

注意. 加法圏とは次の 3 つの条件 (1)–(3) をみたす圏のことである.

- (1) どの対象  $X, Y \in \mathcal{C}$  に対しても  $\text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y)$  が加法群になり, どの対象  $X, Y, Z \in \mathcal{C}$  に対しても合成  $\circ: \text{Hom}_{\mathcal{C}}(Y, Z) \times \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y) \rightarrow \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Z)$  が双線型である.
- (2) 零対象  $0 \in \mathcal{C}$  が存在する. さらに  $\text{Hom}_{\mathcal{C}}(0, 0) = 0$  が成り立つ.
- (3) 任意の対象  $X, Y \in \mathcal{C}$  に対して積と余積が存在し, さらにそれらは同型になる. (それらを  $X \oplus Y$  とかく.)

圏  $\mathcal{C}$  から,  $\mathcal{C}$  の対象の複体の圏  $C(\mathcal{C})$  を作ることができる. まず複体の定義をする. 圏  $\mathcal{C}$  の対象のと射の列

$$\cdots \longrightarrow X^{n-1} \xrightarrow{d_X^{n-1}} X^n \xrightarrow{d_X^n} X^{n+1} \longrightarrow \cdots \quad (1.1)$$

を考える. この列  $X = ((X^n)_{n \in \mathbf{Z}}, (d_X^n)_{n \in \mathbf{Z}})$  が複体 (complex) であるとは, 任意の  $n \in \mathbf{Z}$  に対し

$$d_X^{n+1} \circ d_X^n = 0 \quad (1.2)$$

が成り立つことをいう.

圏  $\mathcal{C}$  の対象の複体  $X = ((X^n), (d_X^n)), Y = ((Y^n), (d_Y^n))$  の間の射を,  $\mathcal{C}$  の射の族  $(f^n: X^n \rightarrow Y^n)_{n \in \mathbf{Z}}$  で, 図式

$$\begin{array}{ccccccc} \cdots & \longrightarrow & X^n & \xrightarrow{d_X^n} & X^{n+1} & \longrightarrow & \cdots \\ & & \downarrow f^n & & \downarrow f^{n+1} & & \\ \cdots & \longrightarrow & Y^n & \xrightarrow{d_Y^n} & Y^{n+1} & \longrightarrow & \cdots \end{array}$$

を可換にする, すなわちどの番号  $n \in \mathbf{Z}$  に対しても

$$d_Y^n \circ f^n = f^{n+1} \circ d_X^n \quad (1.3)$$

が成り立つものとして定める.

## 2 層

層については, [Sh16, KS90] にまとまった解説がある.

### 2.1 簡単な例から

層を考える雛形として, ガウス平面上の関数環を考える.  $\mathbf{C}$  をガウス平面とする.  $\mathbf{C}$  の開集合  $U$  に対し,

$$\mathcal{O}_{\mathbf{C}}(U) := \{U \text{ 上の正則関数} \} \quad (2.1)$$

とおく.  $\mathcal{O}_{\mathbf{C}}(U)$  の加法と乗法を  $(f+g)(z) = f(z) + g(z)$ ,  $(fg)(z) = f(z)g(z)$  で定めることで,  $\mathcal{O}_{\mathbf{C}}(U)$  は環になる. 複素数倍  $(cf)(z) = cf(z)$  も考えれば線型空間, もっというと  $\mathbf{C}$  代数にもなっている.

$U$  と  $V$  を  $V \subset U$  をみたす  $\mathbf{C}$  の開集合とする.  $f \in \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(U)$  に対し  $f|_V \in \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(V)$  を対応させることで環の射

$$\rho_{VU}: \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(U) \rightarrow \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(V); \quad \rho_{VU}(f) = f|_V \quad (2.2)$$

が定まる. この射を包含写像のひきおこす制限射 (restriction morphism) とよぶ.

今度は  $U$  と  $V$  を  $U \cap V \neq \emptyset$  をみたす  $\mathbf{C}$  の開集合とする. 複素関数論では, 次の事実を学ぶ.  $f \in \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(U)$ ,  $g \in \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(V)$  に対し,  $U \cap V$  で  $f = g$  となるとき,  $U \cup V$  で定義された正則関数  $h \in \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(U \cup V)$  で

$$h|_U = f, \quad h|_V = g$$

となるものがただ一つ (!) 存在する.

以上の現象を眺めるために, ここで線形代数の眼鏡をかける.  $U$  と  $V$  を  $U \cap V \neq \emptyset$  をみたす  $\mathbf{C}$  の開集合とする. 次の列を考える.

$$0 \rightarrow \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(U \cup V) \xrightarrow{\rho_{U(U \cup V)} \oplus \rho_{V(U \cup V)}} \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(U) \oplus \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(V) \xrightarrow{\rho_{(U \cap V)U} - \rho_{(U \cap V)V}} \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(U \cap V). \quad (2.3)$$

ここで,  $\rho_{U(U \cup V)} \oplus \rho_{V(U \cup V)}: \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(U \cup V) \rightarrow \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(U) \oplus \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(V)$  は  $U \cup V$  上の関数  $f$  に対し  $f|_U$  と  $f|_V$  の組  $(f|_U, f|_V)$  を対応させる射である. ただし環  $A$  と  $B$  に対し,  $A \oplus B$  は単位元を持つ環と単位元を保つ射の圏 **Ring** における有限積である.\*1

上の列の  $\mathcal{O}_{\mathbf{C}}(U \cup V)$  の部分空間 (部分環)  $\text{Ker}(\rho_{U(U \cup V)} \oplus \rho_{V(U \cup V)})$  は  $U \cup V$  上の関数  $h$  で  $h|_U$  と  $h|_V$  がどちらも 0 となるものの全体である. そのような  $h$  は 0 しかないので

---

\*1 環の圏についてのコメント. 環の圏における積は一般には直積  $A \times B$  であり, 有限の積が直和  $A \oplus B$  である. 積の添字圏として有限圏を取れば  $A \oplus B$  と  $A \times B$  は一致する. (直和は **Ring** の余積ではない!) **Ring** における余積はテンソル積  $A \otimes_{\mathbf{Z}} B$  である. 一般に  $A \times B$  と  $A \otimes B$  は同形ではないため, **Ring** はアーベル圏ではないことにも注意. (始対象は  $\mathbf{Z}$  で終対象は 0. したがって **Ring** には零対象が存在しないのでアーベル圏ではないという議論もできる.)

$\text{Ker}(\rho_{U(U \cup V)} \oplus \rho_{V(U \cup V)}) = 0$  となる．つまり  $0 \rightarrow \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(U \cup V) \rightarrow \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(U) \oplus \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(V)$  は完全である．

今度は  $\mathcal{O}_{\mathbf{C}}(U) \oplus \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(V)$  の部分に注目する． $\text{Ker}(\rho_{(U \cap V)U} - \rho_{(U \cap V)V})$  は  $U$  上の関数  $f$  と  $V$  上の関数  $g$  の組  $(f, g)$  のうち  $U \cap V$  上での値が一致するもの全体である．他方， $\text{Im}(\rho_{U(U \cup V)} \oplus \rho_{V(U \cup V)})$  は  $U$  上の関数  $f$  と  $V$  上の関数  $g$  の組  $(f, g)$  のうち， $U \cup V$  上の関数  $h$  を用いて  $f = h|_U$ ,  $g = h|_V$  とかけるもの全体である． $(f, g)$  を  $\text{Im}(\rho_{U(U \cup V)} \oplus \rho_{V(U \cup V)})$  の元とする．このとき  $U \cup V$  上の関数  $h$  を用いて  $(f, g) = (h|_U, h|_V)$  とかける．この  $h$  に対し  $f|_{U \cap V} = h|_{U \cap V} = g|_{U \cap V}$  が成り立つので  $(f, g)$  は  $\text{Ker}(\rho_{(U \cap V)U} - \rho_{(U \cap V)V})$  に属する．したがって， $\text{Im}(\rho_{U(U \cup V)} \oplus \rho_{V(U \cup V)}) \subset \text{Ker}(\rho_{(U \cap V)U} - \rho_{(U \cap V)V})$  が成り立つ．

$(f, g)$  を  $\text{Ker}(\rho_{(U \cap V)U} - \rho_{(U \cap V)V})$  の元とする．このとき， $f|_{U \cap V} - g|_{U \cap V} = 0$  すなわち  $f|_{U \cap V} = g|_{U \cap V}$  が成り立つ．上で説明した通り，このとき  $U \cup V$  上の関数  $h$  を用いて  $(f, g) = (h|_U, h|_V)$  とかける．したがって， $(f, g)$  は  $\text{Im}(\rho_{U(U \cup V)} \oplus \rho_{V(U \cup V)})$  に属する．よって， $\text{Ker}(\rho_{(U \cap V)U} - \rho_{(U \cap V)V}) \subset \text{Im}(\rho_{U(U \cup V)} \oplus \rho_{V(U \cup V)})$  も成り立つ．以上より， $\text{Ker}(\rho_{(U \cap V)U} - \rho_{(U \cap V)V}) = \text{Im}(\rho_{U(U \cup V)} \oplus \rho_{V(U \cup V)})$ ，すなわち， $\mathcal{O}_{\mathbf{C}}(U \cup V) \rightarrow \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(U) \oplus \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(V) \rightarrow \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(U \cap V)$  も完全である．つまり，正則関数の制限と解析接続に関する以上の現象は，(2.3) が完全列であると言い換えることができる．

## 2.2 層

$X$  を位相空間とし， $\text{Open}(X)$  で  $X$  の開集合全体のなす集合を表す． $\text{Open}(X)$  は開集合を対象とし包含写像を射とする圏になる．

**定義 2.1.**  $X$  を位相空間とする． $X$  から圏  $\mathcal{C}$  への前層 (presheaf) とは， $\text{Open}(X)$  から  $\mathcal{C}$  への反変関手で始対象  $\emptyset$  を終対象  $\text{pt}_{\mathcal{C}}$  にうつすものである．すなわち， $X$  から圏  $\mathcal{C}$  への前層  $\mathcal{F}$  は次のデータからなる．

- $X$  の各開部分集合  $U$  に対する圏  $\mathcal{C}$  の対象  $\mathcal{F}(U)$ ,
- 部分開集合の各組  $V \subset U$  に対する  $\mathcal{C}$  の射  $\rho_{UV}: \mathcal{F}(U) \rightarrow \mathcal{F}(V)$  で，次の条件 (1)–(3) を満たすもの．
  - (1)  $\mathcal{F}(\emptyset) = 0$ ,
  - (2)  $\rho_{UU} = \text{id}$ ,
  - (3)  $W \subset V \subset U$  ならば， $\rho_{UW} = \rho_{VW} \circ \rho_{UV}$ .

元  $s \in \mathcal{F}(U)$  を  $\mathcal{F}$  の  $U$  上の切断 (section) という． $s|_V$  で  $\rho_{UV}(s) \in \mathcal{F}(V)$  を表し， $s$  の  $V$  への制限 (restriction) とよぶ．

### 3 超関数

実解析多様体  $M$  上の超関数の層  $\mathcal{B}_M$  は自然に分布の層  $\mathcal{D}'_M$  を含む。また,  $\mathcal{B}_M$  は脆弱層 (すなわち, 制限射が全射) であるという著しい性質がある。

はじめに  $M$  が実数直線  $\mathbf{R}$  の開区間である場合を考える。  $X$  を複素直線  $\mathbf{C}$  における  $M$  の開近傍で  $X \cap \mathbf{R} = M$  をみたすものとする。  $\mathcal{O}(U)$  で開集合  $U \subset X$  上の正則関数の空間を表す。  $M$  上の超関数の空間  $\mathcal{B}_M$  は次で与えられる。

$$\mathcal{B}_M := \mathcal{O}(U - M)/\mathcal{O}(U). \quad (3.1)$$

$\mathcal{B}_M$  はここで取った近傍  $U$  に依らない。したがって, 次のように余極限を用いて定義するのがよい。

$$\mathcal{B}_M := \operatorname{colim}_{U \supset M} \mathcal{O}(U - M)/\mathcal{O}(U). \quad (3.2)$$

ここでの余極限を  $\mathbf{F}$

### 参考文献

- [Sh16] 志甫淳, 層とホモロジー代数, 共立出版, 2016.
- [KS90] Masaki Kashiwara, Pierre Schapira, *Sheaves on Manifolds*, Grundlehren der Mathematischen Wissenschaften, 292, Springer, 1990.
- [Og02] 小木曾啓示, 代数曲線論, 朝倉書店, 2022.